

テーマ名「共生」

学校名 北海道南富良野高等学校  
校長名 米野 祐司  
担当者名 (教頭) 石橋 栄

## 1 活動の趣旨

本校は、「共生」を当面の活動テーマとして、E S Dを「他者（人間社会・自然環境）と自己とにおける関係の持続可能な発展・成長のための学習」と捉え、E S Dの実践を通して「他人、社会、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる」力の育成を目標とした。

具体的には、自己理解と他者理解、自然環境との共生、地域社会との共生、そしてこれら3つを総合的に連携づける実践的活動としての防災を柱に、(1) コミュニケーションに係わる学習、(2) 自然環境に係わる学習、(3) 地域共生に係わる活動、(4) 防災（水害）に係わる活動を行った。

## 2 活動計画

- |                     |                                    |
|---------------------|------------------------------------|
| (1) コミュニケーションに係わる学習 | 1 学年（4月～11月）・2 学年（8月）・3 学年（4月～10月） |
| (2) 自然環境に係わる学習      | 全学年（7～8月）                          |
| (3) 地域共生に係わる学習      | 1 学年（6月）・2 学年（8月）・全学年（2月）          |
| (4) 防災（水害）に係わる活動    | 1・2 学年（8月～10月）                     |

## 3 活動事例

### (1) コミュニケーションに係わる学習

第1学年においては、宿泊研修（4月）において構成的グループエンカウンターに加えて、年間7回にわけてピア・サポートとして段階的なコミュニケーショントレーニングを経験する。第2学年においては、インターンシップ（職業体験）において、適切な言動に関する練習を経て研修を受ける。第3学年においては、進路に関わり他者（志望先）に関する深い理解にもとづく適切な自己表現（自己アピール文・口頭表現）に関して実践的に取り組む。

### (2) 自然環境に係わる学習（全学年）

近隣の自然河川である空知川（ソラプチ川）及びユクトラシュベツ川、それらが流れ込むかなやま湖に生息するイトウの生態、その保護方法の1つとして周囲の森林環境保全及び河川管理の必要性に関する、小学校・中学校での学習及び調査体験を基盤として、さらに高校の科目「生物」「現代社会」「地理」「家庭総合」などにおける関連学習項目とも関係づけを行いながら、高校生の視点での学習及び調査体験に取り組んだ。これら自然環境のもとで我々の生活が成立していることの象徴としての、夏季湖上のカヌー部活動また冬季氷上のカーリング部活動及びそれぞれの体験授業に取り組む。

### (3) 地域共生に係わる活動

第1学年においては富良野地域の主農産物ジャガイモを用いるポテトチップス工場の見学・実習及び老人介護施設の訪問・介護体験、第2学年においては、インバウンドツーリズム需要による地域観光産業・地域農業関連産業・高齢化に伴う介護福祉関連事業へのインターンシップ、全学年において、それらを包括する活動としてのボランティア活動や地域PR活動、それらの本質的な諸問題を学習しその改善策を検討して参政権のあり方などを模擬体験する有権者教育に取り組んだ。いずれも交流・理解・貢献のフローを基調としている。

### (4) 防災（水害）に係わる活動

平成28年8月末の記録的な大雨により本町・南富良野町が洪水の被災にあったことを契機に「南富良野町実践的安全教育モデル構築事業」（主管・南富良野町教育委員会、平成30年度北海道実践的安全教育モデル構築事業）が今年度推進され、町内小中学校と連携し、全学年を対象に自然災害や気象に関わる知見を深め、情報収集や日常的な備え、連絡体制、助け合いや気配り、避難訓練、救命行動などについて、教科横断的な学習及び実践体験的な学習に取り組む。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

#### ア 生徒の変化

(ア) 本校入学前と比較して、事象に関する観察力・分析力・想像力が高まる傾向にある。自然界や社会を構成する一員としての認識が深まり、穏やかな表情が見られ、自分以外の存在へ配慮したり気遣ったりする言葉が聞かれる

(イ) 学習内容が根底で相互に関連していること（教科横断性）を認識し、教科や「総合的な学習時間の時間」等におけるそれぞれの学習が日常生活や現実世界の何につながっているかを意識できており、学習の意義を理解していることが、学校評価アンケートから読み取れる。

#### イ 教員の変化について

(ア) 関連教科を相互に意識した指導（授業内容の強調点・重複分野に関する調整、カリキュラム調整）、関係のある町立小中学校における指導との連携性を意識した指導、外部（協力関係にある大学・教育委員会等）からの視線を意識した指導、実生活への応用を視野においた広がりのある指導へと展開している。

### (2) 課題

ア 地域や保護者における、ユネスコスクール及びESD（17項目のSDGs含）に関わる認知の向上

イ 教職員における、教科横断的で総合的な学習の有用性（教科の学習に与える影響・教科や「総合的な学習の時間」等の学習が日常生活や現実世界における行動の基盤となる判断力への転移など）に関する意識の高揚

ウ 地域や保護者、教職員、生徒などにおいて、日常生活水準において具体的な変容が散見されるに至る活動の工夫

エ ア・イ・ウを具現化する組織の構築